建設経済常任委員会県外行政視察研修報告書

建設経済常任委員会では、令和 2 年 11 月 4 日(水)～6 日(金)の 3 日間の日程で、宮城県大崎市、岩手県大船渡市、宮城県気仙沼市並びに南三陸町を視察してまいりました。参加者は、櫻井秀美委員長、笹沼昭司副委員長、吉田雄次委員、加藤朋子委員、手塚　定委員、矢澤　功委員、執行部職員1名、事務局職員1名です。

最初の視察先である大崎市では「世界農業遺産　大崎耕土、こだわり農産物 PR 推進事業、あ･ら･伊達な道の駅並びに道の駅おおさき」について、また 2 日目と 3 日目に訪問した岩手県大船渡市、宮城県気仙沼市･南三陸町では「震災からの復興状況」について、それぞれ研修しました。

宮城県大崎市

○『世界農業遺産　大崎耕土について』

『こだわり農産物 PR 推移事業について』

『【あ・ら・伊達な道の駅】並びに【道の駅おおさき】について』

11 月 4 日は宮城県大崎市を訪問しました。

大崎市は、2006 年に古川市と 6 町が合併し発足、面積 796.75 km²、人口 128,503 人、県北西部に位置し、奥羽山脈を隔てて山形県・秋田県に接しています。江合川と鳴瀬川が育んだ広大で肥沃な大崎耕土を有し、日本特有の穀倉地帯を形成、ササニシキ、ひとめぼれなどの銘柄米は古川農業試験場で生まれました。2017 年には「大崎耕土の伝統的水管理システム」が世界農業遺産に認定されています。

大崎市では、「大崎耕土」が農業世界遺産に認定され、訪問した道の駅の商品の多くに、そのシールが貼ってありました。昨年度 344 万人が訪れ、15 億円の売り上げを誇る「あ・ら・伊達な道の駅」では、平日にもかかわらず、駐車場は満車、店内大混雑、レジに長蛇の列でしたが、集客の秘訣を伺ったところ納得。農産物コーナーへの出荷組合員農家数は 230 名、常時出荷者は 170 名と多く、また大崎市の姉妹都市である北海道当別町の「ロイズチョコレート」の人気もリピーターに拍車をかけています。IT を駆使した納品管理、生産者の創意工夫が売り上げに直結し、意欲向上に寄与している点。また陳列棚に整然と並べるのではなく、雑多に配置することで宝探しのよう

な楽しさを演出している点、またあえて正社員比率を高めることで、地元雇用による地域への還元と従業員の意欲を引き出す点等、参考になることが多かったです。

市の中心部に開館したばかりの「道の駅おおさき」は、マンホールトイレや竈ベンチなどを設置し、防災拠点としての付加価値をつけた点がユニークであり、全国に道の駅が点在している現状において、様々な目的と特色を打ち出していかなければならないと感じました。

大崎市　研修風景	

岩手県大船渡市

○『震災からの復興状況について』

11 月 5 日は岩手県大船渡市を訪問しました。

大船渡市は、面積 322.51 km²、人口 35,205 人、県の沿岸部南部に位置し、太平洋に面するとともに北上山地が迫るリアス式海岸を形成。基幹産業は水産業とセメント産業であり、大船渡港は県内最大の漁港となっています。盛駅には全線開通した三陸鉄道と JR 大船渡線（BRT 運行方式）が乗り入れ、碁石海岸や三陸沿岸の最高峰である五葉山など観光資源も豊富な地域です。

大船渡市では、震災後、独立行政法人都市再生機構いわゆるＵＲ都市機構が県、市の事業である津波復興拠点整備事業、災害公営住宅整備事業を後押ししました。被災した土地を自治体が買い取り、区画整理をして、非居住地である商業、工業、公共施設の建設地として割り振る。居住地は浸水予測地

を避け盛り土をした高台に建設し、棲み分けをしました。底地は30年定期借地権を設定していました。ここにいたるまでには、様々な議論、紆余曲折があったそうで、それを乗り越えた職員の皆さんや地域のキーパーソンの努力は並々ならぬものがあったと推測します。まちづくりの原点ではないでしょうか。艱難辛苦を経た住民の皆さんに結束力の強さを感じました。

また、コロナウイルス対策では大船渡市ふるさと振興券が特徴的で、市内全世帯に１世帯当たり１万円を配布し消費活動を促進させるとともに、観光バスやタクシー会社にも保有台数に応じた支援金が配布されていました。

大船渡市　研修風景	

宮城県気仙沼市

○『震災からの復興状況について』

11月5日は宮城県気仙沼市を訪問しました。

気仙沼市は、面積332.44 km²、人口61,564人、県の北東部に位置し岩手県と接しています。太平洋に面した沿岸域はリアス式海岸を形成、気仙沼港は湾口に大島があり、天然の良港となっています。水産業が基幹産業で、全国有数の遠洋・沖合漁業の基地でもあることから、生鮮カツオが日本一であるほか、サンマ、メバル、メカジキも全国屈指の水揚量を誇っています。2019年2月には三陸沿岸自動車道が市内まで延伸、復興事業も進んでいます。

気仙沼市では、震災ツーリズムの一環として、被災した高校を遺構として保存し、伝承館として保存しています。宮城県立水産高校の跡地で、被災時

3 階まで津波が押し寄せ、車が教室に入ってきたものの生徒は高台へ無事に避難、先生方も入試の採点中でしたが屋上まで避難し、鉄塔に上ったりして、また無事でした。記録映像では、悲しみを乗り越え生きていく住民の生き様や、直後の避難所での中学校卒業式で涙の答辞を読む少年の姿など、涙なしには見られないものもあり、当時の様子を垣間見る思いがしました。

語り部の皆さんが修学旅行の子どもたちに説明をしていましたが、当事者の言葉は心に響くものがあり、コロナ禍で修学旅行の行き先が感染者が少ない東北に向いたことを好機と捉え、より多くの人たち、特に若い人たちに、思いを伝えたいとのことでした。生きることの意味、生かされていることの尊さ、家族の大切さ、災害の恐ろしさと備えの必要性、様々な教訓が伝わるよう祈らずにはいられませんでした。

気仙沼市　研修風景	

宮城県南三陸町

○『震災からの復興状況について』

11 月 6 日は宮城県南三陸町役場を訪問しました。

南三陸町は、面積 163.40 km²、人口 12,464 人、県の北東部、太平洋沿岸に位置する。三方を山に囲まれているが、湾内には椿島、竹島、船形島、野島などの島があり、リアス式海岸特有の優れた景観を持っています。地形的な特性から津波の影響を受けやすく、沿岸部には防波堤や防潮堤、水門などが設置されていますが、2011 年の東北地方太平洋沖地震によって被災、大津波により甚大な被害を受けました。

南三陸町では、家屋の 7 割弱が水没するという甚大な被害を受けましたが、高台には被災者住宅が立ち並び、区画整理後の低地には商業施設が立ち並ぶなど、すっかり生まれ変わった街並みとなっていました。商業、水産、観光などの津波の来襲地は 10 メートルかさ上げされ、そこには有名な「さんさん商店街」もあります。主な復興事業である津波復興拠点整備事業、防災集団移転促進事業、災害公営住宅整備事業、土地区画整理事業などが実施されてきましたが、東日本大震災からの復興の総仕上げである「復興・創生期間」が 2021 年 3 月末で終了することから、防潮堤工事がまだ残っているものの、復興事業はほぼ終了ということです。

議場の執行部席には、財務省からの出向である震災復興企画調整監の席も見受けられました。復興事業の補助率以外の町負担部分は「震災復興特別交付金」により町負担は 0 とのことで、まさに国の制度あっての復興であったと感じました。

南三陸町　研修風景	

以上、建設経済常任委員会は、宮城県大崎市、岩手県大船渡市、宮城県気仙沼市並びに南三陸町の 3 市 1 町について行政視察を実施しました。

あ･ら･伊達な道の駅の、第 3 セクター社長：遠藤悟氏の経営理念と職員やスタッフの仕事に対する向き合い方、農産物生産者の競争意識や生産体制の平準化など他の道の駅にない対応は素晴らしく、また正社員化を図りつつ経常利益も確保するなど、参考にする項目が非常に多かったと感じています。

また大船渡市、気仙沼市、南三陸町が、東日本大震災からどう復興してきたか、その過程の問題点等について学ぶことができました。震災後の多くの業務の処理、各自治体からの派遣職員の協力、国からの助言など、あらゆる方面からの協力体制や各種補助金の活用など、短期間での職員の対応の素晴らしさは、将来のその市のリーダーとなりうる人材を多く輩出する結果となりました。職員の質の向上は、まさしくその市の将来を左右するであろう現状を、垣間見た気がしました。

さくら市として、今後の道の駅等の経営と、まちづくり・人づくりへの参考となる、大変貴重な行政視察となりました。

以上、ご報告いたします。